

「日本農業への正しい絶望法」

神門善久(著)

新潮新書 2012年9月20日刊

本書は日本の農業の実態に精通している著者が、日本農業への遺言として書いた渾身の一冊である。

その主張は、①日本農業の強みは技能集約にあり、②耕作技能の発信基地化することが望ましいが、③農地利用の乱れ、消費者の味覚の劣化、放射能汚染問題などが原因となり、耕作技能は低下し、④産業界やマスコミがそれを助長している結果、農業の弱体化に歯止めがかからなくなったというものである。

著者は、現実逃避的にマニュアル依存型のアグリビジネスに期待をかけ、高コストの農業を経済界や政府が容認している現状に強く失望している。しかし、著者はこのような愚かさを嘆くだけではなく、日本には高い農業技能と判断力をもった農業者がまだ多く活躍していることを我々に伝え、彼らの生きた知識の一部でも次世代に引き継がれることを願ってやまない熱血漢である。著者が農業に絶望していない証拠に、土地利用計画の明確化を徹底して実施し、必要であれば耕地面積を減らすことも考えるべきだという提言もしている。

確かに、農業人口は、戦前は50%を超えていたが、2000年には4.5%にまで低下している。いかに優れた農業者にエールを送ろうとも、この産業構造の変化を阻止するすべはないだろう。これは農業に限ったことではなく、日本の多くの伝統工芸や芸能でも継承者が減り、その技術の伝承が危うくなっている。

ライフスタイルが変わって、ほとんど使われなくなってしまった伝統工芸品は一部の職人によって細々と継承されている。注文のうるさい目利きの客に職人は鍛えられてきたとすれば、客筋の減少は仕事の緊張感の消失を意味する。

日本の農業を支えるのが舌の肥えた消費者であることは言うまでもない。農作物への需要は伝統工芸品のように減っていないし、日本の消費者に鍛えられ、野菜本来の美味さと土の力強さを感じさせてくれるような作物が作り続けられることを願っているのは一部の美食家に限られたものではないだろう。宣伝や演出抜きの美味しい米や野菜を食べることを幸せに思う意識は、多くの日本人にまだ共有されていることを信じたい。